可能性の自覚の論理的構造
―最初の教育としての名付け―

岩 井 哲 雄

1．問題の所在

教育は子どもの可能性への信頼に基づいて行われる。それゆえ、そこでは、子どもが可能性をもつということはほとんど自明視されるし、また、実際それは経験的に自明でもあると思われる。しかし、子どもが生まれながらに可能性をもつということは、それほど自明なことであろうか。

ここで問題にしたいのは、経験的事実として子どもに成長の可能性があるのか否かということではない。われわれが問うているのは、可能性という次元が、いかにして論理的に可能となるのか、ということである。そのために、われわれは経験的事実を一旦括弧に入れ、思考実験をすすめる必要がある。この思考実験において問われる問題をみるために、ヴィトゲンシュタイン（L. Wittgenstein）に手がかりを仰ぐことにしよう。

ヴィトゲンシュタインが基準について行った考察は、世界から孤立した個体が、論理的にはどんな可能性も持ち得ないということを示唆しているように思われる。彼は、メートル原器は1メートルであるとも、1メートルでもないとも言えない、と言っている（ヴィトゲンシュタイン、1976：50節)。これは、いかなる意味であろうか。

いま、メートル原器が意識をもつと仮定し、自らの長さを1メートルの基準としている、と見なしてみよう。このときメートル原器は、1メートルという長さを知るために、他の何かに依存する必要はないという意味で、孤立した個体だと言ってよい。

しかし、メートル原器が自身の長さを1メートルの基準としつつ、その基準によって自身を捉えること（測定すること）は、有効になしうるものであろうか。例えば、気温が上昇し、メートル原器が伸びてしまったとしたらどうであろうか。メートル原器自体が1メートルという長さの唯一の基準であるならば（そして、いまメートル原器は孤立していると仮定しているから、それは唯一の基準である)、メートル原器の長さは相変わらず1メートルでなけ

ればならない。つまり、メートル原器は、いかなる長さに変化したとしても、論理的には変化したことにならない。メートル原器の意識にとっては、この場合、自身の長さが伸びたのではなく、実は世界全体が一斉に縮んだのだと言わなければならないであろう。

以上のように、論理的にいって、孤立したメートル原器は、他の長さではありえない、つまり、いかなる変化の可能性ももっていないと言わなければならない。より正確に言えば、孤立したメートル原器は自分の変化を捉えるような視点をもつことができないのである。

孤立した個体という想定は、何事かを判断する際にそれ自身が基準とならざるをえないという意味において、このメートル原器に似ている。ここでなしうることは、自分のある性質を何事かの基準とし、それを自分に当てはめることでしかない。例えば、自分自身のある性質を「優しさ」の基準とし、それによって自分はいかなる人間であるかを測るならば、その答えは必然的に「優しい人間」というものにならざるをえない。ここでは、自分と自分の性質とのつながりの偶然性（可能性）が、つねに必然性に転化しまうのである。こうして、孤立した個体は、自身の変化を捉えるような視点をもちえないことになる。

以上のように考えるならば、子どもが可能性をもっているということは決して自明なことではないし、可能性をもつことがいかにして可能になるのかと問うことも無意味ではないと思われる。本稿は、このような問題意識にもとづいて、子どもの「可能性」それ自体の可能性について考察するものである。

2．いかなるときに「可能性」は不可能か

クリプキ（S. A. Kripke）やパトナム（H. Putnam）らは、フレーゲからラッセルに至るまでの標準的な指示論であった記述説を批判し、「新しい指示論」（New theory of Reference）を展開したが、この理論は、必然性や可能性の概念についての新しい洞察を含むものであった。本稿では、クリプキの新しい指示論の洞察から、可能性とは何かということについての手がかりを得ることにする。ただし、哲学的な文脈では、その興味は主として「必然性」の問題に置かれているのに対して、われわれの興味の中心はむしろ「可能性」の問題にある。したがって、ここでは、クリプキの新しい指示論を「可能性」という視点からのみ再構成して考察することにする。

すでにみたように、孤立したメートル原器自身の視点からは、自身を変化の可能性をもつ個体として捉えることはできなかった。しかし、われわれは、通常、個体をこのように捉えているのではない。例えば、アリストテレスは、プラトンの最も偉大な弟子であり、アレク

サンダー大王の教師であり、『自然学』等の著書を書いた。しかし、アリストテレスには、プラトンに学ばないことも、アレクサンダー大王を教えないことも、『自然学』等の著書を書かないことも可能であっただろう。われわれは、アリストテレスを固有名（proper name）で呼ぶとき、すでに彼を、可能性（possibility）を担うものとして捉えている。

では、固有名による名指しは、いかにして行われるのであろうか。固有名が内容をもたないとすれば、それがその担い手を唯一指定することは不可能であるように思われる。これが固有名の記述説（description theory）をうみだす一つの動機となっている。記述説によれば、固有名「アリストテレス」は、「プラトンの最も偉大な弟子である」、「アレクサンダー大王の教師である」、「『自然学』等の著書をもつ」等々の、性質の記述の束（ないし、「プラトンの最も偉大な弟子であり、アレクサンダー大王の教師であり、『自然学』等の著書を書いた、唯一のもの」という確定記述［definite description］）と同一視される。しかし、固有名を記述の束とみなす理論は、その固有名によって名指される個体の可能性（その個体についての反事実的言明）を考えるときには、背理に陥るのである。節を改めて、この理由を詳しく論じることにしよう。

2－1．意味の理論としての記述説

クリプキによれば、記述説には、二つのタイプを区別することができる。一つは、「意味（meaning）の理論としての記述説」であり、もう一つは、「指示（reference）の理論としての記述説」である。そして、いずれのタイプの記述説も背理に陥るのである。

まず、意味の理論としての記述説をみることにしよう。意味の理論としての記述説は、例えば、「アリストテレスとは、アレクサンダー大王の教師である」と定義したうえで、被定義項「アリストテレス」は記述「アレクサンダー大王の教師である唯一のもの」と同義であるとみなす。さて、この仮定のもとで、次のような推論を行ってみよう(1)。

a）アリストテレスは、アレクサンダー大王の教師ではないこともありえた。

b）アリストテレスは、アレクサンダー大王の教師である。

ここで、b）によれば「アリストテレス」は「アレクサンダー大王の教師」と同義であるから、これをa）に代入して、次の結論c）が導かれる。

c）アリストテレスはアリストテレスではないこともありえた(2)。

しかし、c）は矛盾しているように見える。そして、この結論が矛盾であり、なおかつb）は定義であるために否定できないとすれば、われわれはa）を否定しなければならない。

ここで、可能性とは、「もし……であれば、～であろう（～であった)」という反事実的言明によって捉えられるものだと考えられるとすれば、a）はまさにアリストテレスの可能性を表現している。そして、この言明を否定しなければならないということは、アリストテレスがもつ可能性を否定しなければならないということであろう。前節でみた可能性の欠如は上のような推論によって導かれる。

上記の推論が可能性の否定に至った理由は何であろうか。クリプキが示唆しているところによれば、上記の推論の問題点は、意味の理論としての記述説が、固有名「アリストテレス」が「アレクサンダー大王の教師」を意味するものと考え、この同義性に基づいて固有名「アリストテレス」と句「アレクサンダー大王の教師」とを相互に代置するところにある。確かに、ある種の定義は、語の意味を与えることを目的としている（例えば、「妻帯者は、結婚している男である」のような定義がそれである)。しかし、このような定義の理解を、あらゆる定義に押しひろげるとき、上述の推論にみられるような背理が生じる。つまり固有名「アリストテレス」が「アレクサンダー大王の教師」を意味すると考えた結果、アリストテレスに関する反事実的言明は不可能となるのである。

2－2．指示の理論としての記述説

次に「指示の理論としての記述説」を考えてみよう。このタイプの記述説では、性質（の束）は、固有名に意味を与えているのではなく、ただ固有名を担う対象を指定していると考える。つまり、固有名「アリストテレス」の定義は、「アレクサンダー大王の教師」と「アリストテレス」との同義性を主張しているのではなく、「アレクサンダー大王の教師」という性質がアリストテレスその人を唯一のものとして指定する、と考える。そして、このことによって、上述の背理を回避するのである。

しかし、この考え方も成功しない。この考え方においては、性質の束は、われわれが意味（意図）しようとする対象を指示するのではなく、意図によらずに、いわば機械的に対象を指示する。そして、このとき次のような難点が現れるのである。例えば、「アレクサンダー大王の教師」が別の男だったという新事実が明らかになったとしよう。すると、われわれが今まで固有名「アリストテレス」によって指示してきたのは、われわれの意図に反して、アリストテレスではなく、その別の男（新たに判明した、本当のアレクサンダー大王の教師）だったということになってしまう。それゆえ、「アレクサンダー大王の教師」という性質が、「アリストテレス」その人を指定しているかどうかということは、われわれにとってはつね

に不確定なままである。以上のように、記述の束は、対象を指定するための十分条件ではないのである（クリプキ、1985：36頁）[3]。

また、例えば、たいていの人は、アリストテレスについて「ギリシアの哲学者」という程度の知識しか持ち合わせていない。そして「ギリシアの哲学者」という不確定記述は、アリストテレスだけでなく、ソクラテスやプラトン等々にも当てはまる。しかし、だからといってこのような人がアリストテレスを指示できないわけではなく、実際に彼は「アリストテレス」と呼ぶことによって、アリストテレスその人を指示しているであろう[4]。このように、記述の束は、指示の必要条件でもないのである。（クリプキ、同書：98頁）

以上のように、記述は指示の必要条件でも十分条件でもないから、指示の理論としての記述説は、われわれの指示の実際をうまく説明するものではない。それだけでなく、記述説を指示の理論とうけとるとき、記述の束によっては、いったい誰を指示しているのか不確定となる。それゆえに、記述の束は、変化を通じて単一の個体を指示しつづけること、つまり、単一の個体を諸々の可能性が帰属するものとして指定しつづけることができない。

2－3．孤立した個体にとってなぜ「可能性」は不可能か

これまでの議論で示したように、「意味の理論としての記述説」では、個体の「可能性」が不可能になり、また、「指示の理論としての記述説」では、「可能性」は否定されないが、その帰属先が不確定となる。上に論じたのは、「第三者」がある個体をその諸性質によって捉えるケースではあるが、しかし、ここにみられる背理は、いずれも性質の記述の束によって個体を指定しようとすることに起因する。そして、この難点は孤立した個体が自身を捉える際にも生じうるものである。

意味の理論としての記述説が主張するように、もしも個体が自身をその性質の意味として捉えるのだとすれば、このとき、自身がその性質をもっていることは必然的となる。それゆえ、この場合、自身の、他でもありうる可能性を考えることは、論理的に不可能となる。それは、四角い三角形や、青色をした赤色というものを想像することが論理的にできないことと同様である。孤立したメートル原器が変化しえないと言わざるをえなくなるのは、自身が自らの諸性質と同義であると考えることによって、それが必然的に1メートルを意味してしまうからなのである。

また、指示の理論としての記述説が主張するように、もしも個体が自身の性質を介して、自身を捉えるのであれば、このとき、自らの可能性についての話が、実は見知らぬ他人の可

能性についての話だったということや、他人の可能性についての話が、実は、自分の可能性の話だったということが生じうる。つまり、この理論においては、可能性の帰属先が不確定となるのである。

以上のように、自分自身の諸性質は、可能性をもたない自分を意味するか、または、そもそも可能性を自身に帰属させえないかの、いずれかでしかない。そして、そのいずれの場合も、自分自身を、可能性を担うものとして捉えることにはならないのである。つまり、孤立した個体に対して与えられているものが、自身の諸性質だけだとすれば、それら諸性質によって、自身を可能性を担うものとして指示することはできないということになる。

3.「可能性」はいかにして可能か

3－1. 指示の固定（名付け）と可能性

前節でみたように、アリストテレスが可能性を失うのは、その性質がアリストテレスその人を意味すると考えるためである。また、性質がある個体を意味するのではなく、単に指示していると考えたとしても、このとき考えられる可能性は、誰のものであるのかが不確定なものとなる。

しかし、言うまでもなく、われわれは、誰がアリストテレスであるのかを決めることができないわけではないし、同時に、こうして指定されたアリストテレスを、変化する可能性をもつものと捉えてもいる。このように、人を、可能性をもつものと見なすことは、いかにして可能となるのだろうか。

クリプキによれば、われわれが行っている指示を理解するためのポイントは次のところにある。すなわち、「アリストテレス」のような固有名は、あらゆる反事実的状況において、つねに同じものを指示するものであるのに対して、記述説が個体を指示しうると見なした「アレクサンダー大王の教師」のような記述は、あらゆる反事実的状況において、つねに同じものを指示するとはかぎらないし、また、同じものを指示する必要もない。後者のような記述は、ある場合（例えば現実）にはアリストテレスを指示し、また、ある場合（ある反事実的状況）においては別の人間を指示するのである。クリプキは、前者のような句を固定指示子（rigid designator)、後者のような句を非固定指示子（nonrigid designator）と呼んで区別している。(クリプキ、同書：55頁)

以上の見方をとることによって、われわれは、例えば「アリストテレスが哲学者ではなかったかもしれない」という可能性を捉えることができるようになる。ここで、固有名「アリス

トテレス」を固定指示子として、「哲学者」を非固定的指示子として解すれば、「哲学者」という記述は現実世界において、たまたまアリストテレスという個体と結びついているだけだと考えることができる。そして、これによって、アリストテレスその人と「哲学者」という性質とのあいだの必然的なつながりが切断されるのである。（クリプキ、同書：65-66 頁. 野本、1988：205 頁参照）

しかし、性質が個体を指示しないとすれば、いったい何が指示を決定するのであろうか。クリプキの答えは、個体への指示の固定（fix a reference）は、命名（naming）の場（命名儀式［baptism］）での、現前する対象への直示（ostension）による、というものである（クリプキ、同書：115 頁）。この直示は、「これ・ここ・いま・私」などの指標詞（indexical）によって行われる。例えば、「あの男が、アリストテレスである」という具合に。このとき、たしかに、われわれは性質の記述を手がかりに指示することもできる。例えば、「髭の男がアリストテレスである」という具合に。しかし、このように言うときでも、ここには指標詞が潜在している。すなわち、先の言明は、実は、「あの髭の男がアリストテレスである」という言明に他ならず、指標語が完全に消去されているのではない[5]。指示を行なうのは、あくまでも直示であり、記述は直示によって行われた指示を、せいぜい固定するだけなのである[6]。

3－2．直示の手がかりとしての他者

3－1節でみたのは、ある個体の可能性を、第三者がいかにして把握するのかということである。つまり、その可能性は個体自身が自覚している可能性ではなく、第三者にとっての個体の可能性、いわば加工可能性にすぎない。しかし、教育可能性は、このようなものにとどまるわけにはいかない。つまり、大人が子どもの可能性を捉えるだけでなく、子ども自身が自らの可能性を自覚していることが必要である。われわれの最初の問いは、孤立した個体が自ら可能性をもつ存在として自身を捉えることは可能なのか、そして、それが可能ではないとすれば、それはいかにして可能となるのかということであった。以下で、この問いに答えていくことにしよう。

可能性を担う個体とは、固定的に指示される個体である。そして、このような指示の固定を可能にするのは、個体に対する直示であった。それゆえ、個体が自らの可能性を自覚できるためには、その個体が自身を直示することができるということが必須である。

では、孤立した個体が、自身を直示することは可能であろうか。例えば、指標詞「私」を

用いることによって（あるいは、自分を指差すことによって)、自身を直示することはできるであろうか。これは非常に容易であるように見える。それどころか、直接的現前を最も確実な根拠とする考え方によれば、このような直示は最も確実だとさえ考えられるかもしれない。しかし、ここには次のような困難が含まれよう。

直示は、潜在的にではあるが、つねに「私自身への指示」を伴っている。大澤真幸が指摘しているように、「これ」「いま」「ここ」などの指標詞は、「私」を原点することによって初めて使用可能となる。つまり、これらの指標詞の使用には、すでに「私への指示」が伴っている（大澤、1994：208頁、註8)。そうすると、「私」という指標詞による直示は、指示の循環を犯しているように思われる。つまり、この直示はそれ自体として「私への指示」であるが、その指示を成功させるためには、すでに「私への指示」が可能でなければならない。この場合、「私への指示」を成功させる前提条件が「私への指示」なのである。それゆえ、孤立した個体が、自身を直示によって固定することは不可能であろう。

以上のように、孤立した個体には、自身を直示することができないとすれば、自身への指示を固定することもできないということになる。だとすれば、この個体への指示を固定することができるのは、ただ「他者」のみだということになる。

次の柄谷行人の指摘がこの経緯を理解するための一つの手がかりを与えてくれるであろう。柄谷は、固有名は他の固有名によってのみ固定されるということを示唆していると思われる(柄谷、1994：30頁)。例えば、「富士山」を諸性質の束である「一番高い山」によって指示することはできない。一番高い山は、他にも存在するかもしれないからである。もし、そのような山が存在しているとすれば、われわれの意図に反して、固有名「富士山」は、あの富士を指すのではなく、その別の山を指示することになる。

しかし、その記述のなかに他の固有名を入れることによって、指示を固定することができる。例えば、富士山は、固有名を含んだ記述「日本で一番高い山」によって固定することができる。では、この固有名「日本」を消去することはできるだろうか。例えば、「日本」を「北緯～、東経～の位置にある国」によって置き換えることが可能であるように思われる。しかし、この置き換えは、暗に固有名「地球」を含んでいる。では、「地球」を「宇宙の～の位置にある惑星」に置き換えることで、消去することはできるだろうか。これは可能である。しかし、この置き換えは、固有名が完全に消去されうるということを意味しているのではなく、むしろ「宇宙」とは一つの固有名なのだということを意味している[7]。このように、あるものを唯一のものとして固定的に指示する記述からは、最終的に固有名を消去すること

はできない。換言すれば、指示を固定できる者とは、固有名をもつ他者（すでに固定された存在）だけなのである[8]。

すると問題は次のようになる。他者は、いかにして私が私自身を直示することを可能とするのであろうか。次節で、この問題を考察することにする。

4．最初の教育としての親から子への名付け

これまでの議論は次のように要約される。子どもが自らの可能性を捉えるには、自身を固定的に指示すること、したがって自身を直示することができなくてはならない。しかし、自身の直示は、孤立した個体自身にとっては、指示の循環を生じるために、不可能なのであった。個体を固定的に指示することができるのは、ただ固有名をもつ他者だけなのである。それゆえ、個体が自身を固定的に指示するには、どうしても他者の媒介が不可欠となる。それでは、他者は、個体が自身を直示する際に、いかなる働きをするのであろうか。

個体が自身への直示を成功させるには、指示の循環を回避することがどうしても不可欠である。すると、他者を経由することは、個体の自身への直示において指示の循環が生じることを回避させてくれるのだと推測される。この回避は、次のような仕方でなされるであろう。

個体が自身を直示するとき、私への指示の循環が生じる。しかし、個体が固有名を用いて自身を指示するときには、この循環を隠蔽することができる。たしかに、個体が自身を固有名で指示するときにも、潜在的にこの指示を可能にしている「私への指示」が伴っており、そこでは指示の循環が生じうる。しかし、固有名は、本来、他者によって与えられたものであるから、この潜在している「（私による）私への指示」は、同時に、「（他者による）私への指示」でもある。それゆえ、他者による「私への指示」は私による「私への指示」を代行することが可能であり、この代行によって「私への指示」の循環が隠蔽（あるいは回避）される。あるいはむしろ、他者による指示を経由することによって、初めて「私への指示」が可能になる、つまり「私」が確立されると言うべきである。

論理的な考察の帰結を経験的事実にあてはめることには慎重でなくてはならないが、次の事例は、以上の推測を側面から支持すると考えられる。岡本夏木は１歳７ケ月のＮ児に関する、次のような出来事を観察している。「Ｎ児は、……『Ｎちゃん』とよばれ、『アーイ』と返事するのが面白く、相手に何度も『Ｎちゃん』とよぶことを要求し、その度に『アーイ』をくり返して喜んでいたが、その数日後、母親が仕事をしている側で一人で遊んでいるとき、『Ｎちゃん・アーイ』『Ｎちゃん・アーイ』と自分で自分をよび答えることをくり返して楽し

んでいた」（岡本、1982：164頁）。ここでは、「Nちゃん」という固有名が、自身による指示であると同時に、他者による指示でもあるものとして使用されている。

大人は、子どもに固有名を与えることで（名前を呼ぶことで）、可能性を担う個体として子どもを固定する。次いで、子どもは、自分に対する大人による名付けを受容[9]することによって、自らを固定的に指示する。こうして子どもは、自分を、可能性を担う存在として考えることができるようになる。そうだとすれば、子どもを名付けることは、大人が行う最初の教育だといってよい。名付けは、子どもが自らの可能性を理解するための条件なのである。

文献表

ヴィトゲンシュタイン、1976、藤本隆志訳『哲学探究』、ヴィトゲンシュタイン全集8、大修館書店。
［Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen,* Basil Blackwell. 1953, 1958］

大澤真幸、1994『意味と他者性』勁草書房。
1998『恋愛の不可能性について』春秋社。

岡本夏木、1982『子どもとことば』岩波書店。

柄谷行人、1994『探究Ⅱ』講談社。

クリプキ、1985、八木沢敬・野家啓一訳『名指しと必然性』産業図書。［Kripke, S. A., *Naming and Necessity,* Basil Blackwell and Harvard University, 1980］

菅野盾樹、1995『いのちの遠近法』新曜社。

野本和幸、1988『現代の論理的意味論 ── フレーゲからクリプキまで』岩波書店。
1997『意味と世界』法政大学出版局。

パトナム、1992、飯田隆他訳『実在論と理性』勁草書房。［Putnam ,H., *Realism and Reason:* Philosophical Papers, Volume 3, Cambridge University Press. 1983］
1994、野本和幸他訳『理性・真理・歴史』法政大学出版局。［Putnam ,H., *Reason, Truth, and History,* Cambridge University Press. 1983］

✣註

（1）　この推論は様相的文脈における指示の不透明性として知られるものである。

（2）　同様に、「アレクサンダー大王の教師は、アレクサンダー大王の教師ではないこともありえた」という結論を得ることもできる。

（3）　この背理は、2－1節で挙げた推論を例にとって説明すれば、a）における「アリストテレス」とb）における「アリストテレス」とが同一の個体を指示しているのかが不確定であるような状況だといえる。このような状況では、a）に表明されている可能性を現実のb）に現れるアリストテレスに帰

属させることはできないのである。

（4）　さらに現実には、記述が誤っていても、われわれは指示に成功することもある。例えば、「～の罪を犯した人」という記述によって、ある人を唯一のもの（容疑者）として指示することができる。しかし、後にこの容疑は晴れるかもしれない。この場合、彼を指定していた記述は誤りだったということになる。しかし、だからといって、この記述は初めから真犯人を指示していたとはいえないであろう。この記述は、やはり容疑をかけられたその人を指示していたはずである。

（5）　クリプキ（1985：原注42）参照。記述は「指示」のために使われるのではなく、「固定」に使用される。

（6）　しかし、誰もがある個体の命名場面に居合わせるというわけにはいかない。現在生きているわれわれは誰もアリストテレスの命名場面に立ち会ったわけではない。それにもかかわらず、われわれは固有名「アリストテレス」によって、あの男を指示することができる。それはなぜ可能なのであろうか。クリプキによれば、このような指示は、命名場面で固定された指示が伝達されることによって可能となるのである。これがクリプキの「指示の因果説」の主張である。

（7）　大澤は、指示の最終的根拠が宇宙の単一性にあると考えている（大澤、1994：185-186頁）。

（8）　固有名は諸性質に置き換えることができないから、固有名で呼ばれるものは、諸性質の束以上の何者かである。つまり、固有名をもつ他者とは、諸性質に還元できないような存在を意味している。

（9）　この受容はいかにしてなされるであろうか。名付けについては次の特徴が注目される。まず、それは、「これ・いま・ここ・私」等の文脈依存性をもつ指標詞を用いた直示によって行われる。そして、この指標詞のいくつかは、身体的な所作に換えることができる。また、何らかの性質を利用した直示（例えば、「あの髭のある男が、アリストテレスである」）であっても、その直示がもつ構造は、部分が全体を表すという「換喩」の構造に近縁であり、かつ、換喩は身体を通して知ることがもつ共通の構造でもあると思われる（菅野、1995：38-47頁参照）。第二に、そもそも、名付けは、指示対象に言語的な意味を付与することによって（記述の束によって）は遂行できないのであるから、それは言語的な意味の伝達ではない。以上の点は、他者による名付けと名付けられた者によるその受容は、身体的なものであることを示唆している。

（いわいてつお　京都大学大学院教育学研究科博士課程）